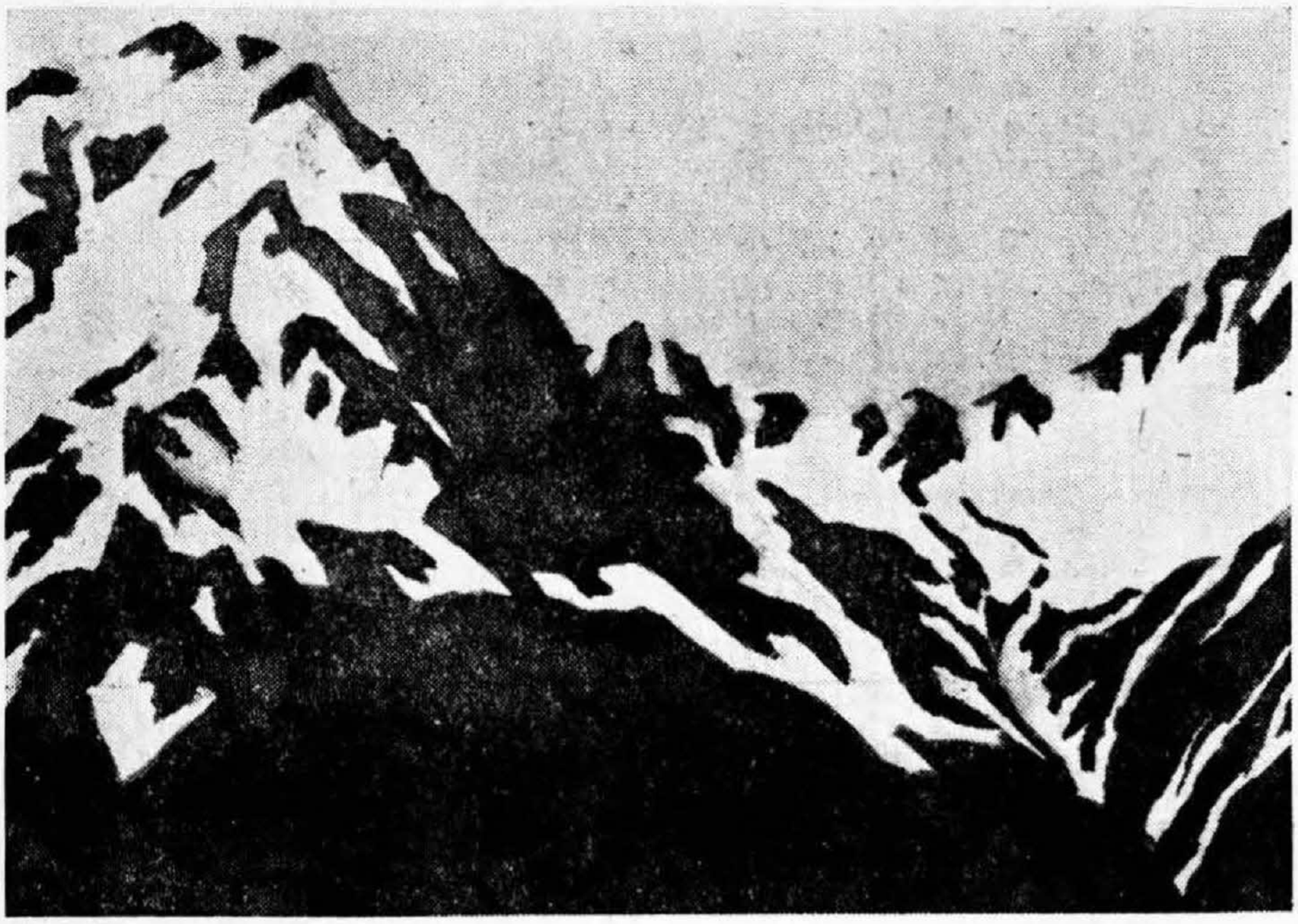

針葉樹會報
通卷第七十五號

# 直方印象記

小林

針葉樹會報七十三號確かに落手しました。地方へ來てゐると針葉樹會報を貰つて何とも云へない嬉しい氣がします。之は東京邊にゐる人々には分らない氣持でせう。何せぼつんと九州に流された者には、氣心の合つた連中の便りが知れるのですから非常に懷しいです。

こちらへ來てからは、堀岡氏に會つたきりで未だ近ちやんには御會ひしてゐませんが、卷頭の大牟田印象記を見て、近藤さんの風丰に久々に接した思ひで愉快でした。でこちらも負けぬ氣になつて一つ三池と對照的な地位にある筑豐炭田の中心地、直方印象記でも簡單に書いてみませう。讀まれる方にも、彼我比較して見ると相當に面白いだらうと思ひます。

こちらへ來て二十日以上になりますが、今に至る迄いさゝかも衰へないで感じてゐることは、こんなに石炭にかすんだ黑つぽい汚い町があるだらうかと云ふことです。先づどんな家でも一樣に黑いです。建てたはじめはどうか知りませんが直方市中で白いものを探さうなんとしたら、大ごとです。炭塵(ヂン)て云ふ奴ですかね。いまに肺の中まで黑くなりさうです。

お次にこんな人柄の惡い地方は、日本でも有數ぢやないかと思つてゐました。この點大牟田もさうらしいので、豈此處のみならんやと思つてほつとしたのですが。何て云ひますか、人々が非常に惡くすれてゐるのです。無愛想で常に人の懷ばかり當にしてゐると云つた手合です。

家建具のガタピシする點でも敢て大牟田に負けません。何故かと云ひますと直方附近一帶の地下は、炭層が走つてをり三菱の新入炭坑を採掘した影響で、破斷角六十度（こゝらはちよつと難しいですが）の地表が掘つた空間だけ沈下するのです。甚しい所では一丈二尺も地表が沈んで一面の沼になつてゐる所さへありま

す。謂はんやその影響を受くる場所の家など、みる〳〵傾いてしまふわけです。農作地は水びたしになり、それを復舊してやる爲各鑛業會社は莫大な金を使つてゐます。

疫病の流行すること之亦相當らしいです。チブスは特に名物らしく、來たトタンに豫防藥をのまされました。物價は高く新鮮な野菜はなく、食物は不味い。かう並べると何にも取柄はなさそうですが事實その通りです。

まあ酒が東京よりちよつと良い位が唯一の美點でせう。住民ときたらアフリカ邊の植民地へ行つたかと思ふ樣な、人相の惡い奴が多いです。渡り者が多いですからね。地方と云つても北九州は信州邊の落ち著いた田園情調を想像したらさんでもない間違ひを犯します。小生と一緒に入つた九大出の男が名刺の印刷を賴んだら、手附を取られたさうで直方では絶對に金を使はんと憤慨してゐました。料理屋なぞで遊んで日には、後で目の玉が飛び出るです。しやうがないので此處の連中は、別府か博多へ行くことにしてゐるのですが、別府は素晴らしく良い處です。こゝの印象記も何時か御報告しやうと思つてゐますが、今度の所はこの位にしてをきませう。近く炭坑實習にて坑内へ下がる豫定なので、又改めて地の下印象記でも御送りしませう。(五・四)

## 五月の鹿島槍行

里見治男
山田亮三

(一)

四月以來鹿島槍、東尾根、天狗尾根登攀(こう書くと丸で凄えが)を目ざして私達は、しきりに、これが決行を焦つたのも、色々の都合で延び延びになり、いよいよ、五月十一日夜、例の新宿發十時四十五分の懐しい中央線で汽笛一聲(嘘をつけ)帝都をあとに、發つことになつた。一行四名、本一の大塚君、豫科の木島山田、里見の面々である。ついでに、綽名を此の際針葉樹會員諸氏に御披露して置くのも、これから駄文を進めて行く上にも、又ペン、クマ等立派な綽名をお持ちになつてゐる先輩諸氏も、極めて知りたがつてゐられることだらうと信じ敢て徒爾ではなからうと思ふ。

大塚君は別名、佐重、木島はキリン、山田は今の所一定した綽名はないが、バットレス(頭を最近分け初めたが、珍妙なればとか口の惡き者言ふ)若しくは角さん等、里見はエビスと云ふ。實物を見れば、ハハーン成る程さうなづかれることゝ思ふが多くの部員のニックネームの中でユニークなのは、大塚君の佐重であらう。

佐重とは、吉田口五合目小舍の池谷佐重の謂である、どつちがどう似たのかは知らぬが、言葉付きや動作とかの、全體の感じが佐重を思はせるのであらう。もう一つ今度の三月の赤岳鑛泉の合宿でおこじよと云ふ、リスと、山ねずみの合の子見たいな小動物が一枚綽名として加つたのであるが、御本人は余り之を喜ばず、專ら、佐重を以て自認してゐる樣である。

バットレスが一人新宿から乘り、後の三人は立川から乘車したため、客車は滿員にて座席もとれず、憂欝になつてゐると、山に理解のありさうな車掌さんが、圖々しく長々と席を獨占してゐる

奴を、痛快にも、叩き起して、四人とも坐らせて呉れた。

明くれば十二日快晴である。七時頃大町に着く。驛前からバスで築場まで行くことにする。「此處がさうだよ」と佐重に、車内から教へて貰つた對山館を少しすぎてからのこと。彼が突然「電車の中に、テルモスを忘れちやつた」と云ふ。これは大變と云ふ譯ですぐに車を止めて、佐重一人驛までテルモスを取りに戻る。一足遲れて來る佐重を築場で待ち合はせることにした三人も、佐重のアタヒンを笑つてはいられない事件がそれから二三分して持ち上つた。エビスの頭の上の棚にテルモスは、つゝましやかにその身を横たへてゐるではないか。三人は、しばし啞然、目をぱちくり。今度はキリンが又下りて佐重に此の旨を知らせるやら大騒ぎ。既にいかれてゐる證據である。そのため、一時間遲れて次のバスに乘つて來る二人を、築場で待ち合せねばならなかつた。

築場はまだ春の眞盛りであつた。櫻の花は咲き薫り、中綱湖には蛙が鳴いてゐた。驛の待合室で朝食をすまして、出發したのが十時、黒澤峠に向ふ。峠の下り頃からであつた。次第に曇り勝ちであつた天候は急に悪化し、篠つく雨となる。魅惑的な東尾根アラ澤は、雲足に隠されて行く。キコリ小舍が一軒、峠の少し下にあつたので、そこに入つて、しばらく雨の小降りになるまで、待つたが、雨は依然中々止みさうもない。頭の上では雷さへゴロゴロ鳴り出す始末、山にまだ入るか入らない内に實に此の悲慘な狀態である。誰だつて好い加減嫌にならう。一體誰のせいだとかウルサ方が、雷鳴と共に、ガナリ出す。皆相當、クサリ氣味だが鹿島川が增水しない内に徒渉したいと云ふので、しばらくして、すぐ又、雨の中をどんどん鹿島川へと下つて行く。しかし、鹿島川の河原に出た頃、雨は一時上つた。太陽もお顔を出してアラ澤、東尾根、天狗尾根が眼前にぬつと顔を出したときは、何とも云へず胸が込み上げて來た。鹿島川は融雪期とて、水量も相當多く、且つ流れも急であつたので充分注意して二ケ所の徒渉を終へた後又そぼ降る雨の中を、雷鳴に肝をつぶしてピッケルを投げたりしてゐる内に、二時半頃、冷澤の小舍に着いた。途中、小舍から、二百米手前に、底雪崩のまざまざしい痕跡があり、巨木が牛裂きにされて倒れてゐるのを見たが物凄い眺めであつた。冷澤小舍の周圍は雪は大部少くなつてゐた。薪がよく燃えつかず相當これには弱つた。一切粗食を旨とした今度の山行には、食物の樂しみはなかつたが、かへつて馬鹿喰もせず經濟的だと思つた。夜になつても雨は降つたり止んだりしてゐたが明日の晴天を祈りつゝ九時ふとんの中へもぐり込んだ。

十三日、五時起床、風は相當強いが天氣はよささうである。朝飯をすましてから風が凪いで呉れゝばよいと思つてゐる内に次第に弱くなつたので、六時半頃小舍を出た。二の澤をつめて行く。東尾根のリッヂに九時に着き、ぶらぶらと第一岩峯の直下まで雪稜を歩いて行く。爺、鹿島槍、天狗尾根の眺めが素晴しい。第一岩峰直下で晝飯。雪庇もヒマラヤ的な所があり天氣も物凄く好いときてゐるので素晴しかつた。東尾根の岩峯は相當の荷があつたし、それに近づいて見て余り面白くもなささうなので第二岩峯左肩へと、三の澤の上部を捲いて登攀した。北槍頂上は二時半、八峯キレット小舍には六時に着いた。北槍からキレット小舍迄の間

は、一ケ所北槍側に於て針金等が雪に埋り、一時間ほどのアンザイレンをして直登した箇所もあつたが其の他はほとんど夏道を樂にとることが可能であつた。キレット小舍は恐らくふとんは無いだらうと思つてゐたが、ふとんを始め、薪、食料品までも揃つてゐて、今日と明日と二日お世話になるには豪遊な小舍であつた。小屋から見た劔の夕陽は特に印象的である。今日は一日中、雪の上を歩いたので皆相當「ソーセージ」色を呈して、焼いて、食べたい位であつた。(以上、里見記)

(二)

昨日一日、快晴だと云ふのに雪眼鏡を掛けなかつた罰で、キリン氏を除く三人共、多少なり雪盲にやられたらしい。一番悪いのは僕で眼鏡が無いと外に出られない。所が僕の二十五錢の眼鏡は出發間際に打壞し、山には持つて來なかつた。仕方がないので割と輕いらしい佐重さんのを借りる事にする。

今日は天狗尾根を登る日だ。小舍の一つ北の鞍部から眞一文字にカクネ里に馳下る。北壁は日光に輝いて素晴らしいが、眼が痛いのでロクに見る事も出來ない。馬鹿な話である。天氣は快晴だが風が強い。昨年助さん達が登つたのより二つ上のルンゼを天狗の鼻目掛けて登る。鼻から見た荒澤奥壁は全く物凄い。こんな所を登るなんて、あきれた心臓だなと感心して、さて天狗尾根の登りに掛つた。此處から見ると此の尾根も割方威壓的だが登つて見ると何の事もない。眼の悪いのを口實にして、一番後から隨いて行くと、丸で梯子段を登るみたいで至極樂だつた。小舍岩で晝食。平常なら大いにのさばり、俺はナポレオンてな格好で食ふのに、雪盲なんて殺生な奴のお陰で、岩陰で目をパチクリやりながら、チンマリと食ふと云ふ可憐さであつた。

小舍岩上の岩場も大した事はなく、雪稜をエンヤラ登つて行くと荒澤の頭に出る。其處で昨日のステップを見つけた時は實に嬉しかつた。これから後は昨日の通り、キレット小舍に着いたのが三時半頃だつた樣に思ふ。

計畫悉く成功と云ふわけで、其の夜は大に騒ぐ。「紫の雲搖らめけば」に始つた唄が「アナアタ——ナーンダイ」に迄下落する頃夜は既に更け白銀の劔の上には月がポツカリ浮び上つて居た。

明くれば又々快晴。釣尾根を越えて歸る事にする。登りには手古摺る八峯キレットもアプザイレンで樂に越えて行く。釣尾根に着くと、南槍は馬鹿に遠く見えるし、眼も痛いので、豫定してゐた南槍往復を未練氣もなく中止して、北俣に下る。初めは相當急なので愼重に下つたが、中頃から馬鹿らしくなつて尻滑りをやる。グリセードよりずつと快適だ。殊に自分のまはりの雪が輕い雪崩を起してモク〳〵と滑り下りてまるで軍艦に乘つてゐるみたいだつた。冷澤小舍で小憩、小うるさい林道づたひに大川澤との出合ひへ、辛い徒渉の後、黑澤峠を馳上り、頂上から逆下しにやなばの驛に飛び込んだ。この間哀れを止めたのは眼鏡を僕に取上げられた佐重さんで、雪盲がひどく悪くなり小舍から驛まで泣通しだつた。僕の眼はだん〳〵良くなつて來て、驛に着く頃はケロリとしてゐたから、一寸圖々しかつたかも知れない。

驛に着いてみると、バスの出る迄一時間半もあり、急いだのが

馬鹿みたいだつたが、此の間某氏のサルマタ事件があり、信濃毎日新聞記者千野君の鉛筆片手の應待があつて退屈から救つてくれた。多分翌日の信濃毎日には「東京商大の壯擧」とでも題して間違ひだらけの記事がのつたに違ひない。かくて美はしき五月の我等が山行は日出度く打出しとなつたわけである。(以上、山田記)

## 續病室拾七號日記

柿原生

○四月卅日　内科部長の廻診あり。部長は神經質な性で、擔任の醫師や看護婦をビクく〳〵させてゐる。兎に角部長となると大したもので廻診の節は藪や竹ノ子連が五、六人はゾロ〳〵と隨行してゐる。そして質問されては赤い顏をして默つてしまふのだから、患者から見れば部長は益々偉そうに見える。竹ノ子こそいゝ面の皮である。

僕は部長に言つた、明日退院し度いと。すると未だ早いと言ふ。時期尚早なんだそうだ。そして擔當の醫師に「患者は退院し度いと言ふ、どうしたら佳いですか?」と質問してゐる。ウッカリ返事をして怒られるよりも默するに如かず、誰も何とも申し上げぬ。心細い奴ばかりだ。すると部長は、今は粥を食てゐるのですから飯を食べてみて異狀なければ退院出來ませう、御飯を食べてからですね、と言ふ。患者には親切だ。そのため今日の晝飯からは飯が出る。軟い粥よりもやはり飯の方が美味しい。考えてみると天幕の中で飯盒一杯のカレーライスを喰ふなんて贅澤な話だ。

○五月一日　新綠の五月だ。天氣は佳い。嫩葉の香がする。病院の中に青い顏をしてゐる樣な時候ではなくなつた。Es ist Mai, wir sind jung! とまで唄はれる。こんな時、身體が元氣づいて來たのだ、ぢつとしては居られなくなる。

今日は初めて入浴を許可された。退院の下準備だなと直觀した。湯に入るのはとても氣持が佳い。湯上りの晝頃の氣持――もう病人とは毛頭思はれない程の爽さを感じた。

午后に大類伸「ルネサンス文化の研究」を讀み終つた。近來になく張りのある本だと思つた。こうした眞面目な研究の成果が月に壹册か貳册は必ず出版される樣になれば、日本の歴史學界も大したものなんだがなあと感ずる。駄本の汗牛充棟は閉口ものだ。夕方になつて岩波文庫のハイネ「冬物語」を讀む。比喩の多いのには參つた。が僕はハイネよりもやはりフイヒテの樣な論理の儼然たるものあるに愛着と敬慕の誠を禁じ得ない。

三日には退院してやらうと決心する。松方さんの「アルプス記」を電燈の光で讀む。

○五月二日　面白いもので身體に元氣がついて來ると床の上に起きたまゝ自分の病症記録を眺めるのに興味を感ずる。そして看護婦の顏を眺めると不快な感情を催すのである。コイツ生意氣な、嫌な奴と言つた感じである。

扨病症記録だが、是は本當に興味がある。熱と脈と呼吸がグラフに示され、Krankheittag 別に横に伸びて行く。Recept の欄には投藥處方が示され Hcl とか Mg とかあるので、藥の性質をおぼろに知ることが出來る。Mg-sulf 15.0 が Mg-sulf 10.0 更に 6.0 と快方に向ふまゝに減じてゐる。硫酸マグネシウムなんて奴はもう澤山だ。おまけにこんなのを見ると中學時代の化學教室の

ことを想ひ出すのである。化學は嫌な學科だつた。

又別欄に Blutdrück 120-80 と小生の血壓が示され、Hb=103 /R=601,6000/W=7400 ともある。Rは赤血球、Wは白血球だそうな。それから四月廿九日の欄に、Gehen とあるから何の事かと考えてみたら、僕が初めて歩行が許された事を記録したらしいとしか受けされぬ。投藥處方で ① ausgesetzt とあるのは ① の藥を中止すると意味する。もう近い中に Krankheittag の某欄に entlassen と書かれる事だらう。こんなものに興味を感ずるのも生への執着からだ。

松方さんの「アルプス記」の六十二頁に、冬と春の境ひ目、モンテ・モロを越えた時に、「半日で山小屋に行きついてしまふやうな夏の旅では山登りは結局小屋から上だけになつて、恐ろしく澤山のものを看逃してゐるさいふことを知つたのもこの旅の御蔭であつた」と感じられてゐる。面白い觀察だなどと云ふ月並みの言葉で感じ入つたり紹介したりするには、何だか忽體ないものを含めてゐる言葉だと思つた。神河内のバス道が崩れたので德本を越して涸澤入りをした時、神河内に入るは德本よりと銘じ入つた自分の氣持は未だに消えないでゐる。日本の夏山にして斯の如し。波久禮の驛から三峯迄歩いた田部さんは遙に又深いものを觀ることの出來た人だらう。

夜廻診に來た醫局長のN氏は、明日退院出來るだらうと云つた。部長がウンと申せば最早問題ないのである。窓外には雨が降り若葉を濡してゐる。朝日の夕刊に百貨店の夏帽子賣出の廣告が載せられる初夏の頃となつたのか。

○五月三日　曇天である。朝食は食パン・バタ・卵黄・牛乳である。勿論北穂のケルンの側で中村屋の黑パンにバタをつけて存分に嚙る程の氣持よい食事ではない。が今日は退院だと思ふと全く何とも言えぬ小氣味佳さを感ずるのである。

退院と云ふ事は看護婦にも嬉しいらしい。が此の看護婦は小生には時々嫌な奴と云ふ感を懷かせる。と云ふのは此の女は信濃も信濃、黑菱の產で丸山與兵衞の親戚だそうだが、全く東京風になつてしまつて御上品過ぎるのである。後立のことも碌に知らない。「そんなこと知らすか」とこちらで云つてやると恥しいと申す。だから氣に喰ぬのである。尤も森川を診察したと云ふザイルの何たるやを知らなかつたK病院の若い醫師よりはましだが。

十時半頃部長の廻診である。相も變らず無表情のまゝ「何を食べてる—ウ」と病症記錄を眺め乍ら、「退くか、もう歸れイ」と云つたまゝ去る。これで好いんだ。瀟條と降る雨にまかせて午過ぎの東京市街の裡にと僕は二週間の病院生活に訣別した。

## ナンガ・パルバート　一九三七年（一）

大塚　武譯

一九三七年のドイツ、ナンガ・パルバート遠征隊が、ヒマラヤ登山史上にも嘗てなかつた全滅と云ふ悲慘事を以て終つた事は衆知の如くであるが、この前後の事情について、最近部に購入したP. Bauer の Auf Kundfahrt im Himalaja の中から、以下二、三節譯出して見やうと思ふ。

× × × ×

○最後の日（一四三頁―一四五頁）

六月十四日　我々の友はその日の日記を次の如く記してゐる。（譯者註、言ふまでもなくバウアーの救援隊により發掘された隊員の日記である）

ヘップ（Hepp）

六月十四日　七時頃起床、その時は快晴。人夫は今日上で必要な荷物の一部を荷上げせねばならぬ。ファンクハウザー、ミュルリッター、プェッファー及び私は滯在、他の者は人夫を連れて登路を開く。十一時半再び霧がかゝる。然し雪は降らない。我々は天幕内の整理をする。二時半彼等も上から歸つて來る。

ファンクハウザー（Fankhauser）

夜中殆んど寢られなかつた。長い間寢つかれないまゝに、絶えず山の事を考へる。朝は快晴、苦力は既にお茶を煮てゐる。今日は第五天幕への急な道の上端まで荷上げする事にする。ヴィーンハルトマン、ゲットナーが先導、シェルパ人九人之に從ふ。ダートンダップが咽喉を治療する爲下へ降る。スマート中尉も四人のバルティス人をつれベースキャンプへ。皆下れるのを喜んでゐる。

私はヘップ及びミュルリッターと共に天幕に留る。

プェッファーは尾根に出て寫眞撮影。殘念乍ら再び層雲が上つて來る。我々の天幕は私が整理する。又混雜を極めてゐる料理用天幕内もやつて置く。天候は今の所先づ良好。

ハルトマン（Hartmann）

今朝の氣溫は零下廿一度。六時半頃太陽が出る。極めて魅惑的で皆天候の好轉を信ずる位。今日は二才年長の腕白小僧「小さいカルロ」もさう思ひ込む。八時頃朝飯、我々が獨立した料理用天幕を建てた昨日の午后からはシェルパ人の協力で飯は大きな料理所で作られる。

今日は第五天幕用に準備され整理された荷物を全部氷河のテラス（六三五〇米）の上まで上げればならぬ。こうしてをいて、天候の好轉を利して、可成り面倒な、次の日のプランになつてゐる第五天幕への移轉を行ふ積りである。

九時半頃ゲットナーとヴィーンと私は上方のラッセルに向ふ。九人のシェルパ人が荷物を負つて之に續き、更に深い粉雪の中をラッセルして行く我々を最初の間フィルムに納める爲カメラを以てミュルリッターが之に續く。その後も彼は大分遠くから我々の姿を撮してゐた。

先づ我々は交代でラッセルを行つた。次第に斜面が急になる頃私が先頭に立つた。屢々膝までもぐる樣な事もあつたが疲れる事もなく進んだ。そして私と他の者との距離は相かはらず增して行く程であつた。漸て雪の固くしまつた急傾斜の箇所にさしかゝつた。安全な足場を作る爲には五回もキックステップせねばならなかつた。然し間もなく荷物置場にしやうと決めてゐたテラス直下の美しい氷の鼻に到着した（一時）。四邊は驚く程美しかつた。今日は極めて調子良く登つた、全く喘ぐ事もなく、――而も典型的に深くもぐり、他の者より一層私を苦しめた雪の中でも。

これ程調子の良かつた事については、私には驚異の樣にも思はれた。そしてじつと冷靜に考へて見た。確に一日中今日は私の顏には嬉し相な笑が浮んでゐた事だらう。さうだ、さうだ、私の誕

生日迄には頂が、一人夫はゆつくりと隊員の後に續いて一人づゝ氷の鼻から到着して荷物をおろす。

プエッファー（Pfeffer）

最低零下廿一度ではヴイーンが第五天幕へ移る事を決心する程天候は確ではない。ダー・トンダップと四人のバルティス人を連れてベースキャンプへ下るスマート中尉が去つた後で、ヴイーン、ハルトマン、ゲツトナーが、荷上げに行く九人のシエルパ人を連れて、第五天幕への急斜面をラッセルに行く。

同時に、即ち九時十五分私は一人寫眞撮影に幕營地の東方主稜のシャルテ（六二八三米）に出掛けた。最初私は底知れぬ位深い雪の中のラッセルを樂にする爲輪カンジキをつけて登つた。十時十五分シャルテに達した。然し非常な眺望に惠まれてゐる筈の此の場所が、今は四邊はすつかり暗い霧に閉されてゐる。霧は暗く尾根の上を流れ、上の方へ風に吹き飛ばされて行く。漸てその切れ目からジルバーザッテルが日の光に輝やいて見える。又急斜面の上には隊員や人夫達が注意の叫聲を受け乍ら下りて來るのが見える。間もなく私はこのシャルテの北方の無名の一雪峯（六三二〇米）に登つた。その間に又霧が四邊一面閉してしまつた。然し之こそ「私の最初の六千米級」なのだ。私のまはりはすつかり灰色であり、東方に向ひ下部になる谷間のあたりも全てが暗く閉されてゐる。丁度眼に見えるあたりに一つの岩頭が霧の中に幽靈の樣に浮んで來た。その中に再び日の光に當つた氷壁の一部が、或ひはジルバーザッテルのあたりが、灰色の霧の中から光つて見えた。ゆつくり私は天幕に歸つた。そこでは薄日がさしてをり、間もなくミンマの手で料理された Kani（食事の意）が出來上つた。今日は午后になつて天氣が崩れなかつた最初の日である。その中漸て霧も退散し、嵐が雪をナンガやラキオツト・ピークの彼方に追ひやり、北方の山々が異常な程はつきりと視界に現はれて來た。之等の中でも我々の現在の位置より高いのは極く少數で後の大部分は我々より低く連り、インダスの河谷は實に五千米も深く横つてゐた。

非常な速度で最後の明るく光つた雲の群がラキオツトピークやチョングラピークを越え、又ジルバーザッテルやナンガの側面をかすめて飛び去つて行く。そして風が雪瀑（Schneekaskad）を打ちはらつて行く。第四天幕建設以來今日始めて日の光に當る事が出來たのだ。皆の氣分は、天候がやつと確に好轉して來て明日は第五天幕に移れるだらうと云ふので非常に高揚して來た。それから峯の嵐が始まつた。そしてハルトマンの誕生日迄には頂上が陷落する事になるだらう。ギュンターと私はゆつくりと遙か彼方の山波に近づいて行く落日の中に長い間立ちつくしてゐた。

私は非常に幸福であつた。そして全てのこの莊嚴な眺めに見入つてゐた。六時頃峯を吹いてゐた嵐が我々の天幕にまで達し始める頃ギュンターと私は天幕に入つた。然し天幕の外側には未だ長い間、入日が赤々と輝いてゐる。中では愉快な温な光が點された。時折嵐が天幕のまはりを烈しくゆすぶる。その間に我々は今日の日記をつけてゐるのである。（以下次號）

## 通信

○松木謙三君より　（五月十日附　編者宛）

如何です少しなれましたか。月報を受け持たされたさうだが御苦勞樣。精々原稿を送りますよ。と云つて未だ一度も出してゐません。日曜に雨が降つたらなど考へてゐるのですが、雨が降ると一日中晝寢をして駄目だ。明十一日は小谷部の歡迎會です。皆集ることでせう。先日關西家族大會をやりました。岡田、黑田の奥さんにお目にかゝりました。

○鷹野雄一君より　（五月十八日附　編者宛）

御丁寧なお便りを戴きながら御返事もせず大變失禮致しました。會員皆樣、山岳部の諸兄も皆御元氣の事と思ひます。小生本年一月以來千葉の方に參つて居りますが、思ふ樣に外出する折もなく今日に至つて居ります。只今は富士の板妻廠舍で毎日々々猛訓練を繰返へして居ります。然し大體來月上旬には皆樣と一夕位ゆつくりお會ひ出來る暇が得られさうで樂しみに致して居ります。二、三日中千葉へ歸へりますので又お便り致しませう。

○日江井正己君より　（六月一日附　編者宛）

先日山岳會報及針葉樹會報おりがとうございました。久しぶりの會報面白く讀みました。僕も御隆樣にて漸く先月廿五日退院出來ました。早速御通知申上げるべき所延引致しました。申譯ありません。永い間寢てゐたせいか全體的に體が弱つてゐてなさけない位です。歩行も滿足には出來ません。毎日病院通ひで暮して居ります。でも四、五日したら學校へゆかれると思ひます。前の日曜に大塚が來て久しぶりに色々話をしました。貴兄におかれても是非會社の歸りにお寄り下さい。退屈にて弱つて居ります。（後略）

○小谷部全助君より　（六月一日附　編者宛）

先般は御便り有難う、又會報七十四號落手、原稿不足との事、何か書き度いと思つて居ますが最近一寸人事の移動があり、執務後間もない小生に可成り過重の責任を脊負せられて了ひ、毎日仕事に迫はれて全く暇なしですから、當分御勘辨下さい、實際最近の樣な時勢では小生の係（金物全般の購買）は多忙且困難です、毎日相場を調べ種々術策を使つて、本場の大阪商人と交渉するんですから、大學の教育より經驗です、所で森川達經過良好との事何よりです、毎日忙しくガサ〳〵してると、山が戀しいですれ、寫眞等出して見て居ると遠い昔の想出の樣に感じて來る昨今、些か淋しい感じです。では今日はこれで。

## 山岳部報告（四月・五月）

### 記錄

(1)金峯山（四、二七—四、三〇）木島利夫　高橋廣三郎　宮城恭一　山田亮三　久保孝一郎　樫淵明

松平牧場の小舍から頂上に登り、二パーティーに分れて野邊山と、增富とに下り、鹽山で落合つて驛に一泊、翌日の歡迎登山に合流した。

(2)乾德山、新入部員歡迎登山（五、一）　望月達夫　佐々木誠　原鐵三郎　岩崎利一　大塚武　里見治男　宮城恭一　高橋廣三郎　木島利夫　山田亮三　久保孝一郎（新入部員）深谷光茂（豫三）

樫淵明（豫二）　二ッ谷富雄（豫一）

乾德山行は延引に延引を重ねたので、新らしい人が意外に少なくて殘念だつたが、登山としては充分意義があつた。乾德山はその山容豪宕を極め（この凄じい文句は山麓の案内書にありましたが、讀み方について諸説紛々でした）殊に頂上近くの岩場は小さい乍ら相當です。

(3) 鹿島鎗・東尾根・天狗尾根（五、一二—一五）大塚　里見　木島　山田

三日間の快晴に惠まれて實に快適な登山をした。北鎗東面のこの尾根は實際は外觀程の凄味はない。緊張したのはむしろ鹿島川の徒渉とキレットの通過であつた。（詳細は本文參照のこと）

(4) 大菩薩峠（五、一五）　深谷　樫淵

(5) 白峯三山縱走（五、二五—五、三〇）佐々木　岩崎

驛前から有野行のバスが出ないので、思ひ懸けぬ時間を浪費したが、兎に角鮎差まで行けた（廿六日）。從つて釣尾根の登りには日が暮れ、北岳のバットレスを仰ぎつゝ落込のコル上ピークで、ビヴアク（廿七日）。廿八日には北岳を越えて大門澤迄飛ばす。雪は農鳥岳直下の澤の出合迄詰まつてゐた。廿九日は西山泊り、卅日は甲府で丸茂さんの御厄介になり、すつかり愉快になつて、列車に乘つたら玉錦の一行に出合つた。丸茂さんには衷心より感謝の意をさゝげます。

日　誌

○部員集會　四月十二日（火）於本科部室

出席者（本科）佐々木　榎本　原　岩崎　大塚（豫科）里見

宮城

久方振りの顔合せ。今回のアクシデントにつき話合つて後、新入生歡迎會及び歡迎登山のことを決定した。

○新入生歡迎會　四月十五日（金）於豫科部室

出席者（本科）佐々木　鷲崎　榎本　原　岩崎　大塚（豫科）里見　木島　宮城　高橋　久保　山田（新入生）仲澤經雄、三好信義、二ッ谷富雄、中城覺、平山正照（新入部員）深谷光茂（豫三）、樫淵明（豫二）

○部員懇談會　四月廿日（水）於本科部室

出席者（本科）佐々木　鷲崎　原　岩崎　大塚（豫科）里見　木島　宮城　高橋　深谷　小泉　久保　山田　樫淵　平山　三好　二ッ谷　仲澤

○定期部員集會

五月六日（金）於本科部室（本科五名、豫科八名）

五月十三日（金）於本科部室（本科三名）

五月廿日（金）於本科部室（本科四名）

五月廿七日（金）於本科部室（本科二名）

○本年度山岳部委員　代表（佐々木）庶務（原　里見）記錄（岩崎　高橋）會計（船本　宮城）器具（日江井　木島）圖書（大塚）

消　息

矢作太郎氏　長らく御病氣の由。御快愉を心から御祈り申し上げる。

高木英二氏　兵庫縣武庫郡精道村芦屋伊勢講田五四五へ轉居。

山口稔一氏　小石川區林町九十二番地へ轉居。
鷹野雄一氏　六月上旬休暇を得て上京。別記の如く會を開く。
尙ほ國立の部室を訪れ、森川君を見舞ひ、更に下阪して小谷部氏等にも會はれた。六月十三日退京、當分松本聯隊に入營。
小谷部全助氏　兵庫縣阪急沿線西宮北口甲風園二號地菊屋アパート内、へ轉居。
船本文治君　六月七日退院。住所は當分左記の通り。
中野區新井町三九一、吉崎方。
森川眞三郎君　六月二十日退院。近い中靜かな温泉場に行つて當分靜養の由。

定例集會　五月廿七日（金）於如水會館
出席者（會員）中川　吉澤　村尾　久保田　吉澤松　增山　小柳　柿原　新羅　望月（部員）原　大塚　山田
久し振りにマゴさんの例の大雄辯に醉ふ。大塚より鹿島槍行の報告があつた。

鷹野雄一君歡迎會　六月七日（火）於如水會館
出席者（會員）鷹野　吉澤　村尾　久保田　園山　高瀨　吉澤　松　增山　丸茂　小柳　柿原　新羅　松浦　望月（部員）佐々木　榎本　原　岩崎　大塚　宮城
軍服姿のエチオピヤを、久々に如水館に迎へて夕食を共にする。クマさんがおそくみえたので、ペンちやんの御挨拶にてはじまる。食事が終つてから中集會室で、例の如くおそくまで話しが續き、エチ君のお話が簡單にあつて會を閉ぢる。雨のそぼ降る中を、又會ふ日を期して別れた。尙エチ君は當分松本に居るので、夏の休暇にでも來松せらるゝ會員部員諸氏は御遠慮なく御訪れ下されたしと。住所は大概淺間溫泉近邊の由。

關西針葉樹會例會　五月十一日（水）於北濱如水會
出席者　五十嵐　松木　宇佐美　森　岡田　黑田　中島　森脇　和田
姓が變つてピンと來ないが、各れも顏だけはおなじみの心臟型だ。京都からわざ〳〵五十嵐・宇佐美兩氏が來られたので近年にない大盛會になつた。定刻六時迄新人の顏が見えないので心配したが八時頃迄に皆揃つた。小谷部君が丁度重役の招待會で出席出來ず、太田さんがお店の都合で欠席は甚だ殘念でした。關西も今年から特別張り切つてゐる新人を迎へて益々賑やかになつた。これまで關西が不振だつた會報も益々賑はすことでせう。
新人の現役や東京の益々盛なる話に花が咲き關西も大いに山へ出掛ける樣にと先づ來る廿九日に琵琶湖の西側の山へ行くことになつた。秋は別府で九州關西大合同大會を催すことにもなりましたから、東京からも賑々しく參加下さる樣今から御願ひして置きます。それから六月から關西の幹事が小谷部君となりましたからこれからは益々盛大になります。（中島記）

關西ハイキングの會　五月廿九日（日）
參加者　五十嵐　同令息徹君　森　岡田　黑田　中島
朝から曇天だつたので出席者少なく殘念でした。七時十七分大阪驛發、京都で五十嵐氏と落合ひ大津の北方志賀の都、阪本から大原女で有名な大原へ出る約七里のコースである。

曇つてゐるので暑くも寒むくもなく「五月の微風」に爽やかなハイキング日和。四明嶽のケーブルをさけて箱庭見たいな澤を登る。途中道を間違えたか、行き詰つて野バラや木苺に引掛つて、皆凄腕を血だらけにしてゐる。而かも片側が谷で危險だ。併し五十嵐さんの徹君平氣なもので、「お父ちやん、おつこつちや駄目だよ」とおやぢに注意してゐる有樣だ。約三十分ゴソゴソしてゐる中にやつと上の方に木馬道を發見しドシ〳〵と登つた。

この邊に特有な美しい植林や芝生を敷いた樣な山間を縫つて二時間、横川中堂に着く。大杉に圍まれたこの中堂は壯嚴無比。小鳥の囀り以外には全く靜である。此處で晝飯。徹君食ふわ食ふわ流石五十嵐さんの御子さんだけあるさ、皆感心。食後森氏のスーパーシックス、岡田氏のクロームライカが活動する。一時二十分出發。一時四十分仰木峠。仰木峠は字の通り大木密生し晝尙暗い。途中四、五尺もある大蛇數匹に出食したり、蟇が出たり不氣味であつた。三時やつと大原着。こゝでは御承知の通り皆女が頭の上に荷物をのせて働いてゐる。男を殆んど見掛けないから不思議だ。しぼりたて牛乳を呑んで、五時京郡着ビールを乾杯して開散。（中島記）

**關西針葉樹會例會**　六月十五日（水）

出席者　五十嵐　森　中島　岡田　黑田　小谷部

前略　梅雨氣味の昨今如何、前年迄は今頃ともなれば物さびたあの懷しい部室に集つて、夏山の準備にいそしんだものだつたが。先週の金曜、珍らしくも鷹野が訪れて來て、學生時代に立還つて大いに歡談し、實に愉快だつた。目下小生口癖の樣だが仕事がえらく多忙で、原稿も思ふだけでよう書けぬ。昨日（十五日）關西針葉樹會例會を開いた。會するもの右の六人。野村ビル如水會支部で晩餐を共にし、珍らしくも山の追憶、スキーの話に身が入つた次第。右宜しく會報記載を乞ふ。（以上十六日附小谷部君よりの端書）

**針葉樹會基金**

在京會員の一部の方は、既に御承知かとも思ひますが、今春より本會に新らしく入られた方より、入會金として一人金三圓也を頂戴し之を本會の基金と致しました。本年度は五人分金十五圓也で、之は增山氏の勤務される東京貯蓄銀行の「普通貯金」（年利）に針葉樹會代表者、吉澤一郎の名義で預け入れました。この基金は特別の場合にのみ用ふる豫定で御座居ます。右御承知をき下さい。

尙申しおくれましたが、本年度の會計幹事は前年度通り新羅二郎君が續けて、やつてをられます。御盡力に對して厚く御禮を申して然るべきでせう。

**會費納入方の御願ひ**

本年度の會費御納め下さいますよう、何卒御配慮の程願ひ上げます。（年額在京會員六圓　地方會員三圓）

送金先　豊島區雜司ヶ谷六ノ一一二二　新羅二郎宛